



I はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案された。初めに、協力者から次のように呼び掛けた。

「人権教育は「思いやり」や「やさしさ」、心の持ちようのみによって解決できるものではない。自分と向き合い、他人ごとで終わらせない学習を進め、私たち自身の問題として受け止め、全教科、全領域に関わる中身の点検を行い、豊かな人権教育の創造につなげていこう。」

この後、討議の柱が確認され、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

－報告1－㉔

知らないことを知っていくことが

人権問題を解決する方法

～「色覚と人権」の授業に取り組んで～

(福岡県同教)

－主な質疑と意見－

福岡 所属の教員にも研修は行ったのか。また、他学年とはどのように連携を取っているのか。

報告者 意識をして研修を行なっているわけではない。自分の授業を見てもらうことが研修だと思っている。他学年には「難しい。当事者やからできるんでしょ」と言われた。私は当事者じゃない人が言うから意味があるのではないか。

山口 自分も当事者。知ってもらうことを中心に実践している。地域にある学校での研修の予定、研修の要望はあるか。

報告者 小学生向けのテキストはある。工業高校には独特の壁があるように感じている。高等学校の教員に理解されにくいのかも。初めて

聞きましたと言われた。

東京 報告の中で「少数色覚も世の中の役に立っているんだよ」という発言があったが、役に立つ、役に立たないではなく、他の落としどころはないか。(役に立たないと少数色覚はだめなのか) と思ってしまう。

報告者 役に立たなくてもいいと私も思っている。「色覚に特性があっても役に立っているんだよ」と聞いたとき、(自分が傷つけられてきたんだな)と自覚し、涙が出た。自分は生まれてきてよかったんだと感じた。同じ立ち場の人を下を向かないようにそう言っている。

佐賀 私の小学生の息子は緑と茶色の区別がつきにくい。報告者のような人が学習・実践を続けてきて、こうやって話してくれるから自分の息子のことを話せた。

報告者 元気づけられた。「エリックの赤と青」という絵本がある。このような社会にしていきたい。

大阪 三種類の色の付箋を使って授業をしていた。しかし、話を聴いて、形を変えるなどの工夫にすればよかった。知ることが人権課題を解決する一歩。「少数色覚の人が困らない社会を作っていく」「すべての人が安心しておびえずに暮らしていく」そこが大事なことだと思う。子どもたちが暮らしを振り返り、具体的に改善していきたいと言ったことがあったか。

報告者 黒と赤の区別ができなかったとき、「先生、今日黒で丸付けしたの?」と言った。それを聞いて「今日は黒色で採点する日だ」と笑顔で優しく言ってくれた。嬉しかった。

東京 就職の時に色覚の問題が繋がっていく。選択の自由がそこなわれるのではないか。色覚に関する授業以外のことでできをつけたいことはあるか。

報告者 学ぼうとして、地域ともかかわること。

大阪 自分自身の生い立ちなどを話すのは勇気がいること。生徒の前で自身のことを話した授業はとても勇気が言っただろう。マイノリティに寄り添っていくことを大事にしている。授業を受けて、自身のマイノリティをカミングアウトした生徒はいるのか。今後、知らないことを知ることによって自分を考える事は大事だと思っている。今後、

どのようなことを考えているのか。

報告者 かつて部落差別を受けたことがある、というのを言った子がいたが、事後だった。

知らないことを知っていくのが自身を解放していくのが人権教育だと思っている。思いを言葉にしたとき、自分にもまだこんな差別意識があるんだなと感じる。知らないことを知ることが人権課題を解決していく一つの方法だと思っている。

一報告2-④

差別が見えにくい時代における部落問題学習をどう実践するか、一つの提案（京都市人教）

一主な質疑と意見一

滋賀 自分自身は差別はあかんと思って子どもと関わっている。「このクラスのみんななら大丈夫」と思える子になるのか。

報告者 なんでも言い合える雰囲気を作ったのではないかと。最初は先生らしくなければならぬと思っていた。しかし、素直に謝る、失敗談を話すなどする中で話せていったのではない。

奈良 「このクラスなら話せる」というのはとても大事な集団作りの結果だ。なぜそうなったのかをしっかりと突き詰めてほしい。建前を本音にするかが人権教育だと思っている。

グループワークの中身で、仲良くなるために「出身を知りたい」というのをどうとらえているか。

報告者 人権学習に夏と冬に取り組んでいる。当事者から話も聞いている。そんな積み重ねではないか。

人となり等などの互いを知る授業は道徳等でおこなっている。お互いの事を知る、じっくり知るといいう取組が今、なされている途中である。偏差値にこだわる地域であるように感じる。子どもたちも職業や年収等がきになるということなのではないか。

奈良 全員の前で語った子に対して報告者はどう返したのか。また、周りの反応はどうだったか。

報告者 急にどうした、となった。が、周りには知っている子もいた。他クラスにも外国にルーツのある子もいたこともあってか、おおらかな様子であった。

東京 中学生がどうやって差別はだめなんだと気

付いたのか。「人のことをレベル分けしていた」ということにどうやって、中学生がその気持ちと向き合ったのか。

報告者 学校の偏差値で進路を決めようとしている姿があって、叱った。数字だけで決めてはいけないという話が心に残っていたのではないかと。

東京 全校生徒に向かって生徒が語った、なぜそんな発想をしたのか。部落差別に注意深く目を向けていかなければならない、差別は周りが考えていかなければならない。差別と闘っている力をどうつけていくか。

報告者 当事者にいつまでも講演をお願いできない。当事者の思いを聴くことは大事だと思っているが。

インターネット等に情報があふれていて、生徒たちが見る機会があるだろう。情報を見分けていく生徒を育成していなければならない。

大阪 改めて差別はする側の問題だと思った。部落問題学習に取り組むエネルギーはどこからくるのか。部落問題との出会いを教えてください。

報告者 自分の未来と向き合うことがしんどいと思っている子がいた。その現状を何とかできなかった。今関わっている子が、かつてかかわった子たちを差別することにはなあってほしくない。そんな社会にもしたくない。差別する立場に立つ子たちをどうにかしないといけないと思った。

今までの自分の学習は自分事になっていなかった。

大阪 差別の加害者にも被害者にもなってほしくないという言葉が響いた。「人を下に見ていた」という生徒の言葉は生徒間で共有できたのか。

ムラのよさは授業で行ったのか。

「部落に対する差別発言に出くわしたときどう返答するか」は出身の生徒と出身でない生徒で返答が変わる。この発問はしんどい思いをする生徒がいるのではないかと。

報告者 発言は学級通信に載せ、共有もした。ムラの良さについては、歴史や人々の姿などをあげ、触れた。発問は諸刃の剣だと思っている。

一日目の討論

東京 どれだけ学んでいても、自分のこととして

考えるのは難しい。報告者（福岡）にとって色覚特性とは何か。それが言葉になると母にちゃんと謝れるのではないか。傷つけたことをどう整理して子どもたちに伝えていくか。その話をいつか聞かせてほしい。

山口 私たち教職員として、正しいことを伝えていくのは大事。プラスの情報を入れるだけで世の中、過ごしやすくなる。色覚の問題だけでなく、ユニバーサルデザインでどの人も使いやすくなる、これはすべてに通じることだと思う。みんなが暮らしやすくなるように、日々実践の中で授業を展開できないかを悩んできた。それを周りの教員に広げられなかった。そこに力を注いでいきたい。

京都 福岡の報告を聞いて、いるからする、いないからしないではないということに共感した。京都の報告から感じたことは、学力の厳しい子が「進学校に行きたいと言ってきたら」どうするか。生活が厳しいところでは、教員の力に頼らざるを得ない。学校の教員しか頼れない場合家庭はどうするんだ。回答は必要ない。

神奈川 福岡の報告で「残念ながらカミングアウトはなかった。自分の力が足りない。」という発言を受けて、先生に打ち明けられないことはダメではないと思う。言いに来ることが目標ではない。

神奈川 「このクラスだから語れる」でいいのか。自分の立ち位置を問い続けて、立ち続けている。差別に負けない集団を作っていくことが、今までの実践で学んできたこと。

東京 本音と建前があって、建前で人を見てはいけなさと、変わっていきける生徒はいるだろう。逆に本音を言わない生徒もいると思う。知的障がいの子との学びで色を使うことが多くある。もう一度授業を組みなおさないといけないと感じた。知らないでは済まされない。

奈良 当事者だからできるんだ、と言われたこと、それはおかしい。昨年度の全人教の奈良大会で「何年、私は自分の受けた差別の辛さを語ればいいんだ」と言っていた。当事者でなくても取り組む必要がある。差別をなくすために自分はここにいて。そのために、正しい知識をつける。当事者の思いや生の声を聴かせることを大事にしてい

る。そうしないと自分事にならないのではないか。当事者が笑顔になれる実践をしていきたい。

奈良 限られた時間の中で期間を決めて人権教育はするものではない。自分とどう向き合うか、子どもたちとどう向き合っていくのか、を確かめながら日々を過ごす、それが基盤である。差別をなくすために何をするのか、それを確かめていく必要がある。

一日目のまとめ

福岡の報告を聞いて、私たちが正しい知識を持っていないことで差別を助長してしまっただけではないと思った。知らないことを知っていくことが人権問題を解決していく一つの方法だという生徒の感想が心に残っている。また、日常生活からユニバーサルデザインの意識を持たないといけないと思った。

京都の報告を聞いて、当事者だけが差別に負けない学習ではなく、マジョリティ側への反差別の学習に取り組む姿に共感した。差別に気づく、そのためには人権学習が大事である。それを明日も確認していきたい。

－報告 3－④

「南葛」で学んで（東京都同教）

－主な質疑と意見－

大阪 南葛は人権に関する感覚が鋭い。その中で見える子どもたちの課題はどれだけ共有されているのか、つかんでいるのか。つかんだことを授業展開し、どう変わったのか。それをつかむ中で報告者はどんなクラスを作っていきたいのか。

報告者 人権課題は人それぞれにある。ターゲットを一人にしては進めていけない。まずは学校に来てほしいと思っている。学校に来られない理由は何なのだろうと常に考えている。毎学期、部落当事者に講演してもらっている。その後、子どもたちからのカミングアウトもある。いろんな生徒同士で、自分のしんどいことを話しあっている。授業で色んな課題を取り扱い、背景を分かっているのが大事だと思っている。生徒の発言等をクラスに還していきたい。

島根 学びの保障について詳しく教えてほしい。

学びが困難な生徒にどう学びを保障しているのか。

報告者 すべての取組は進路保障につながっている。背景を知り、いろんな子がいるということを知っていく。小中全く学校に行っていない子も多い。わかるように授業を展開したい。ここだけは、これだけはという授業。

大阪 D さんの就職差別についてどう総括されたのか。就職試験に受けるかときいたとき、「じゃあいいです」と言った。そうするしかなかった、それが差別なのではないか。

報告者 警備会社を希望したが、決まりがあって就職できない、と言われた。それは間違っているとわかった。就職試験に受けるかときいたとき、「じゃあいいです」と言った。自分はそこに引かからなかった。そこに差別の現実があったのではないか。なぜもっと丁寧にその時に対応しなかったのか。自分の課題であると思った。

鳥取 自身の出自をかけなかったことが差別ではない。自分のルーツを語ること=正義ではない。さらけ出せないのはだめ、と子どもも思ってしまう。報告者の祖父が報告者の母に部落出身であると伝えた意味はなにか。

報告者 闘える自分になりたいと思っている。打ち明けるきっかけを与えられる人になりたい。祖父は自分のルーツを大切に思っていたと思う。だから伝えたと考えている。

神奈川 「自分も部落出身だ」といったときに部落の認識は。今の部落の認識は。部落出身であることをこれからも大切にしてほしいという言葉はどうとらえているか。

報告者 自分は南葛に選ばれしものなんだという感じだった。ちゃんと部落を捉えずに話した。勉強していく中で、自分の中でしっかりした部落というものを持たなければならぬと思った。今は、自分から発信していきたいと思っている。部落を大切にしてほしいという言葉は人権教育を大事にしてほしいということかとも思ったが、今回、自分で部落を手繰り寄せていく作業をしたら、自分の家が見えてきた。母が叔父を養っていた、なぜそこまでののか、母は叔父を見捨てなかった、などと考えていると、どんどん大切になってきた。

部落を大事にしていくということは、家・育ってきたことを大事にすることだと捉えている。

奈良 母の姿を知りたい。どんな気持ちだったのだろう。「あなたは部落出身だ」と伝えることで何を伝えたかったのだろう。お金をもらいに来た時の母の姿、母は叔父をどう見ていたのか、それを知ることが母を知ることにつながる。南葛で頑張るうえで知っていてほしい。

報告者 深い理由はないと言っていたが、南葛で頑張っていくうえで伝えておかなければならぬ、これから考えていってほしいと思っていたのではないか。母は叔父を最後まで見捨てず、お金を渡していた。文句は言っていた。入院したら駆けつけている姿を見て、優しい母だと思っていた。

大阪 学友のカミングアウトを聞いた周りはどうな感じか。取組の中で卒業後、どんな展望を持っているのか。

報告者 はっきりと言葉に出すことはない。(今、きっとこれに大変さを感じているんだな)と想像できるようになった。学校に行くようになると、生徒たちは元気になっていく。二十歳の前に死にたいと漏らす子たちがいたが、将来を語るようになった。多くの学びの中で自分は自由に生きていんだという、人生を選択する元気が出てきたのではないか。

奈良 当事者とは誰を指すのか。人権課題を見たときに、当事者とはすべての人を指すと思っている。課題に向き合っていくのはみんな。差別や現実を変えていくのは被差別の当事者ではない。差別をなくすエネルギーは周りにある。すべての人が当事者ではないのか。

報告者 被差別の当事者という意味で当事者と使っていた。みんな当事者だと自分も思っている。被差別の当事者の生徒がそこにいると思って授業を組み立てたうえで、他のみんながこの差別を許せないと思えるような授業を考えなければならぬと思っている。

—報告 4—⑳

ちょっと待って! A もじゃない? ~誰ひとり取り残さない社会を創る~ (大阪府人連)

—主な質疑と意見—

東京 Aが施設に保護されてしまうと、もう学校として何もできないのか。母が夕方から朝までいないという現状を受けて母と話したのか。Aは報告者を待っていると思う。

報告者 一切会えていない。今に至るまで会えていない。保護された日、学校が母と話をした。

滋賀 Aは今どこにいるのか。被差別部落「怖い」というイメージはどう解決したのか。BとAの関係とBのその後は。

報告者 転校したが居場所を創れなくて学校に行くようになって不登校。丁寧に部落問題学習に取り組んだ。自分と同じ境遇のB。Aも最初は気にしていた。Aの話を守られて以来しなくなった。子どもたちもしなくなった。

奈良 学校からAがいなくなるとAと報告者の関係は切れるのか。Aに会いに行かないのはなぜなのか。自分なら禁じられていても会いに行く。

報告者 切れるとは思っていない。Aにとってのロールモデル・希望でありたいと思った。会いに行くべきタイミングがあるのかもしれないと思っている。

神奈川 どうやってAに話していたのか。なぜ保護されるとき立ち会わなかったのか。

報告者 何度も家に対してセンター・学校は話をしていた。Aにも丁寧に話をした。「頑張るわ」と言って車に乗っていった。報告者が保護の事実を事前に知らないほうがAの希望であり続けられるのではないかという学校判断があった。

神奈川 温かいクラスだと思った。しかし、クラスはそんな様子でも家に帰れば現実がある。Aは刑務所に入っている父をどう思っているのか。また、遊びに行っている母をどう思っているのか。

Aが抱えている課題とは何か。なぜAに報告者自らがいろいろきかない。

報告者 父については直接話したことはない。Aは父にかわいがられていて、相当落ち込んでいたと当時関わった教員から聞いた。

「(母に対して) ええ加減にせえ」と言っていた。遊びに行く母を見ているAの顔は寂しそうだった。

セーフティネットがない家庭の姿が子どもにも連鎖している。Aと話をしていないのは逃げていた。

聴いていいのか迷っていた。

総括討論

報告者(京都) 本音と建前がある、それが人間の本質。そこに気づくのも人権教育。差別をなくすものとして行動していく人を育てていくべきだという意見があった。その通りだと思って実践していく。けれど、代位歩は差別にNoと言えること。

報告者(福岡) 少数色覚の子がカミングアウトすることを目的にしているのか、という意見をもらった。その通りだと思った。

自分は闘っていなかったなと思った。闘うべきは同僚やなかまだ。

報告者(東京) 報告は自分の大切にしたいことを伝えた。自分の変容が中心。みんなの大切なものを大切なものとして考えていく。

報告者(大阪) 学校からAがいなくなるとAと教員の関係は切れるのか。と指摘があった。Aが来てくれたらうれしい。しかし、ずっと近くにいられるわけじゃないから仲間とつなげていかないといけないと思った。

東京 インターネット上で部落を暴露されることと自身が語ることは違う。後者は出身であることをもう一度抱きしめようとしている。立場宣言は、その子が誇りをもって生きているということを知ること。自分を語ることは誇りをもって立つこと。

長野 私は長野の被差別部落出身である。子ども会で出身宣言をしていた。自分にとっての部落とは何かを考えた。酒飲みの父のことを考えていた。父がお酒を飲まざるを得ない状況は何だったんだろう。それは母を幸せにしなければならぬ、借金を返さなければならぬというプレッシャーと戦っている姿だったのだろう。この姿なくして自分にとっての部落は語れない。父の生きてきたすべてが部落差別との闘いだった。

大阪 どうやって次の世代に繋いでいくかが課題。ムラの子、頑張っているから大丈夫、という人がいる。今はそうでもこれからもそうか。地域にながってもらって保護者とつないでもらった。だから、地域の人に出会ってほしい。

大阪 自分は差別される側だっと思ったとき、隠さなければいけないと思った。

大阪 報告者の姿を借りて、ここはどうするんだと自分に還すことが必要だ。当事者がいないことになって授業が進んでいないか。忘れずに実践していくこと。

() 教師を変容させるものは後悔がおおい。子どもの変容で教師も変容していこうよ。

大阪 職員室で聴こえる声で希望も無力感も感じる。このような場に参加して、元気をもらっている。隣にいる人から始めようと思った。

東京 一人で変われないだろうから、一緒に変わりましょう。自分がやりきれなかったことを子どもに語ろう。

奈良 人権課題を超えていくには出会いが必要であると思う。奈良には「むなつき坂をこえて」という書物がある。ムラの子たちの家に向かう中で胸がつかえることが何度もあった。報告して報告者に何が返ってくるのだろうか。それは気づいたことを広めていくこと。

大阪 生い立ちを語るときは勇気がいる。けれど大事。

分散会のまとめ

被差別の当事者が社会にいることを考え、差別の実態に学び、自分が差別する当事者であるということの自覚も必要だときづかされた。

他人事ではなく、自分事として人権問題を本音で語り合う姿勢ことが人権確立をめざす教育の創造の根幹であると思う。